

第32回 全国読書作文コンクール 優秀作品集

小学生5点・中学生4点

公益社団法人全国学習塾協会

令和四年度 第三十二回 全国読書作文コンクール

小学生の部・大賞

オオカミに勝つための家



福田 胡央（小四）

世の中には、目に見えない「わざわい」という名前のオオカミがたくさんいる。戦争、飢餓、暴力、貧困、犯罪、差別、搾取など、いろいろなオオカミがいるのだ。

ぼくは、「だれでも立ち寄れる家・みんなの居場所」で、フードシェア会のお手伝いや、子どもの遊び相手をするボランティアをしている。その家は、だれの事も見捨てない社会を作るために活動をしている。

ぼくはずっと、いつも食堂でボランティアをしていた。けれど、コロナが広がったので集まって食事をする事ができなくなり、月一回の子供たちも食堂はフードシェア会に変わった。みんなで笑って料理をしたりおしゃべりをする時間も無くなり、悩み事や困り事も話せなくなつた。そこでできたのが、いつでも立ち寄れる居場所だ。

その家には、オオカミにおそわれているけど、どうすればいいかわからずにがまんして、今までだれにも相談できずにつらい思いをしている

人も、たくさんやつて来る。何度も来るうちに、どんなオオカミにおそれて困っているのかを、話してくれるようになる。そうすると、オオカミと戦つて勝つために必要な、人や施設を教えてあげることができる。オオカミと戦っている間も、大変だったりつかれてしまつた時は、がんばらずにその家へ来て、居場所として休んだり、話を聞いてもらうこともできる。そしてその家は、相談にのつたり、全国から寄付で集まつた必要な食品や生活用品を渡すことができる。そうすると、安心してまた強くなることができる。

ぼくは、親がオオカミにおそわれている家の子どもと、一緒にごはんを食べたり、遊んだりする。大人と一緒に、赤ちゃんのお世話をする時もある。子どもと遊ぶのは、家の中だけでなく、公園へ行くのも楽しい。でも、遊んだ後でその家へ帰つた時、まわりがつらい顔をしているのを見ると、少し元気が無くなつてしまう。不安になつてているように見える。でも、みんなが笑つていると、子どもも笑つている。そうすると、みんながもつと元気になる。そんな時は、ぼくもとてもうれしい気持ちになる。

オオカミに勝つには、がまんせずに、助けを求めて相談すること、戦い方を知ることが大事だと思う。ぼくは、みんなが笑つて元気でいるために、とても大切な家でボランティアを続けて、もっと困りごとがある人を笑顔にしたい。そして、この家の事をもつとたくさん的人に知つてもらい、助け合つて、子どもも大人も、みんなの笑顔を増やし続けた

い。だつてオオカミに勝つための最強の武器は、みんなの笑顔だから。

対象図書名　りぼんちゃん

大賞へ、審査員のひとこと

まず、小学四年生で「」まで周りの大を見ていることがすごいと思いました。

コロナなどの問題で周りの環境がどんどん変わっていく中でも「自分だったらどうするか」しっかりと自分に置き換えたイメージが書かれていてとてもよかったです。

小さなことでも一つ一つのことを見逃さずに見ていく姿勢は、あなたの成長の大きな材料にもなると思いますし、何かあつた時にもひとつずつ乗り越えていく姿が想像できます。周りをよく見て自分が今どこでどうあるべきか考えられるのは、今后あなたの強みになつていくと思います。大賞受賞、おめでとう」ざいます。

受賞者のひとこと

学校から帰つてすぐ、お母さんに「今日、作家審査じやる？」と聞くと、だまつて塾の先生から届いたメールを見せてくれました。

読んでいくと「大賞を受賞しました」と書いてあり、一瞬よくわからなかつたけど、なんども読んで、自分が大賞に選ばれたと知り、すごく嬉しかったです。

その後で、僕の姉が三年前にこのコンクールで子ども食堂の事を書いた作文を、初めて読ませてもらいました。みんなで集まるのは楽しかったな、大切な時間だったな、と、すごくなつかしかったです。あの時、一緒に料理をつくったおじいちゃんは去年亡くなり、中学生だった姉は高校生に、小

一だつた僕は、小四になりました。二人ともまだボランティア活動を続けているけど、子ども食堂はフードシェア会になりました。

僕はまだ子どもので、来る人がどんなオオカミと戦っているかわからぬけど、「一緒に楽しむ事」が僕の役割だと思います。これからも「ハルハウス」で、楽しみながら笑顔でボランティアを続けて、早くまたみんなで集まって食事がしたいです。

小学生低学年の部・最優秀賞（小二）

シェフは楽しい



「シェフでいこうぜ」この題名は料理好きなぼくの興味をすごくひきました。ぼくも大斗と同じように幼稚園の小さいころから料理を作つていて、料理のプロにあこがれていたからです。

小 棟 亮 豪

大斗は、心の病気になつたお父さんをふるさとの味「てびち」を作つて元気づけて喜ばせようとした。ぼくも大斗と同じで、料理を作るときには家族を喜ばせる気持ちを持つて、がんばっています。学校の宿題が早く終つた日にはお米を研いだり、サラダを作つたりします。夕ごはんに家族が「おいしい」と言つて食べてほしいからです。しかし、時には失敗をしてしまつて涙が出る事もあります。大斗は、何度も何度もチャレンジをしていて感動しまし

た。少し前に玉子のからをむこうとして、失敗してしまった事がありました。その時は悲しくなつてすぐにあきらめてしまいました。来年は、ぼくも大斗と同じ四年生になるので、あきらめずにチャレンジできるようになつているかなと考えてしまいました。

料理をしながら大斗はお父さんと、ふるさとの沖縄の海の話や大好きなおばあちゃんの話をしていました。ぼくも、お母さんと料理をしているときに今日の出来事や話しにくいことを話したりします。例えば学校でいやな事があつてだれにも相談できなかつた事も料理をしながら話をするといやな事も忘れて、心が通じあえる気がします。

この本を読んで、たくさん学ぶことがありました。まず、あきらめずにやり通せばかならず成功すると言うことです。くじける事はたくさんあるし、失敗する事もたくさんあります。でもあきらめにする事が一番大切だと思います。そして、料理だけではなく、何かをいつしょにすることで心が通じあえると言うことです。成功する事や心が通じあえる事は、うれしい気持ちになります。相手の知らなかつたことを知れたり、共通点を見つけたりもできて、楽しい気持ちになります。お父さんと大斗のやり取りは、大斗がお父さんの事を知るきっかけにもなり、心を通じ合わせる事もできました。だからやっぱりシェフはシェフ以上の意味があつて楽しいです。

対象図書名　シェフでこうぜ！

受賞者のひとこと

「最優秀賞」というすばらしい賞を受賞して、ぼくはうれしさと信じられない気もちでいっぱいでした。

ぼくは、小さい頃から本を読むのが大好きで、この本を読む時もどうな展開になるのかドキドキしながらページをめくつていきました。初めて書く読書感想文だったので紙に書いて自分の気持ちを表すのはとても難しかつたです。どうやつたらうまく表現できるのだろうと普段考えないことを色々と考えることができました。読書感想文に取り組まなかつたら出来ない経験が出来ました。素晴らしい経験と賞をありがとうございました。

来年も又、がんばって読書感想文にとり組みたいです。

小学生の部・最優秀賞（小四）

心を落ち着かせる不思議な言葉

渡邊 莉音



そばにいつも弟がいて明るい日々を過ごしているわたしには、お兄ちゃんを亡くした咲良と咲良の家族の寂しさ、笑顔のないしづかな家は想像がつかない。読み始めてすぐそう思つたけど、読み進めるうちに引き込まれとても悲しい気持ちになつた。

一年半前かわいがつていた愛犬が急死して、初めて身近な命との別れとその寂しさを知つた。四年生の咲良とわたし。人と動物のちがいはあるけど、大切な存在を失つたことが重なりあの時の寂しさ、悲しさを思い出した。

「アゲハチョウの幼虫を育てる。」咲良はお兄ちゃんとした約束において

兄ちゃんがいなくなつた後も向き合つてゐる。寂しさも悲しみもある中で、調べたり、考えたり、相談したり、お兄ちゃんとの思い出を思い出しながら前向きに毎日を過ごしてゐる。不安になつたときには、お兄ちゃんの、「きっと、大丈夫。」この言葉に励まされ幼虫と向き合う力をもらつてゐる。そしてついに幼虫はアゲハチョウになつた。

亡くした命にはもう会うことができない。そう思うと寂しいし悲しいけれど、その命といつしょに過ごした時間や思い出はずつと思い出すことができる。咲良のお兄ちゃんを亡くした後の過ごし方からわたしは家族や友達との絆と、約束を守ることの大切さ、目標に向かつて自分で考えて行動することの大切さについて考えることができた。

わたしは今、新しく迎えた二匹の愛犬と暮らしてゐる。亡くなつた愛犬を思い出しながら新しい命と向き合つてゐる。新しい命が家にきてすぐケガをしたことがあり、大丈夫か心配になることがあつた。すぐに手当をして寄り添うことでケガも治り大丈夫だつたので安心した。家でも学校でも、困つたときだれかに大丈夫か聞かれると、相手が自分を想つてくれる優しさに救われる。反対にだれかが困つているとき大丈夫か声をかけ、大丈夫と言われるとよかつたとほつとする。

「大丈夫。」この言葉には、心配のときも安心のときも心を落ち着かせる不思議な力があると感じた。四年生のわたしが大人になるまでには、まだまだたくさん的心配ごとや安心する出来事があると思う。たくさんの命との出会いや寂しく悲しい別れもあると思う。そのため、「大丈夫。」という言葉が支えてくれるような気がする。困つたとき、くじけそうになつたときにはこの言葉を思い出し、わたしも咲良のように決めた目標に向かつて頑張りたいと思う。自分や家族、愛犬や友達との約

束や絆、命を大切にこれから日々を過ごしていきたい。

対象図書名　きっと、大丈夫

受賞者のひとつこと

わたしが書いた読書感想文が最優秀賞に選ばれたことを知り、去年いただいた優秀賞を上回る賞をいただけたことに驚きと喜びを感じました。

この夏出合つた1冊の本から、はじめて本の中に引き込まれる感覺を知ることができたこと、言葉のもつ意味や力を感じ過去と未来の自分について考えることができたこと、その思いを書いた作文を先生方に読んでいただきこのような賞をいただけたことをとても嬉しく思います。

受賞を知つたあと改めて本と読書感想文を読み、わたしが感じた思いやこれから目標についてもう一度考えることができました。

この本のあとがきには、この本を書いた先生の命に対する思いが書いてあり、そのページもまたとても印象に残っています。これからもいろいろな本を読み、知らなかつたことを知ることができたり考えたりする時間を大切にしたいです。ありがとうございました。

小学生の部・最優秀賞（小五）

私の魔法

時 信 瑞 果



私の魔法を見付けたい。なぜならこの世の中には、たくさんの魔法があふれていると思うから。魔法を見付ける前に、オオカミ、すなわち「わざわい」との戦い方を得なければならぬ。この世を生きるためにたつて、さける事のできないたくさんの苦しみがあふれている。一生懸命生きている人々の胸を引きさき心臓をえぐり出してしまうようなわかりやすいものがある。でも「わざわい」は、わかりにくい所にもひそんでいるという事。

私の周りに理緒のような友達が身近にいるかはわからない。それを感じることも今の私にはできていないと思う。それは自分の「生きる」だけで精一杯だからだと思う。そうした中で、楽しいと思う日もあれば、理不尽だと思う日もある。そんな時は、自分の中でその嫌な出来事を消化できないので母に話を聞いてもらう。母は私の事を認めてくれる時もあれば、認めつつも逆の立場の気持ちも気付けるように言つてくれる。私の話を聞いて、そうやって色々と考えてくれるところは母の「やさしい魔法」の一つだと思う。

私が初めて手に入れた魔法がある。それは二年生の時に、私のすること全部にあげ足を取る男の子がいた。最初の頃は、反論していたけどだんだん疲れてきたので、母に相談すると「相手にしないこと」と言われた。反論しなければ、言い返されることはないはずだと。相手に反論すれば、

るのはすぐエネルギーを使う事なので、相手にしないことで自分を守る事を知った。それはすなわち「逃げる魔法」だ。母に話しを聞いてもらえていなかつたら見付けることはできなかつたと思う。

まだまだ小さな私だけど、私なりの悩みや葛藤はたくさんある。周り人が聞いたら、たいした事ではなくても私にとっては重要な事だつたりする。私の周りにはいつも最後まできちんと話しを聞いてくれる家族がいる。そして一緒に悩み考えて丁寧に答えを見付けてくれる。だから私は生きづらい世の中でも生きていられるのだと思う。

物語の中に「知識は暗闇を照らす光」とある。親にも「勉強は邪魔になる物ではないからしっかりやろう」と言われる。大人になつてたくさん知識は色々な場面で役に立つとこうとらしい。知ると知らないでは大きな違いがあるという事だ。勉強することは、ある意味「魔法」を身に付けているんだと思う。

今の私にはとても大事な二年生の時に手に入れた「逃げる魔法」がある。何にでも立ち向かうだけではなく、時には逃げても良いという魔法だ。この時代、色々な事がめまぐるしく変化しわざわいもたくさん増えている。私だけ魔法を見付けて、助け合えればより良くなると思う。そのため私は、一日一日を大切にしてたくさんの魔法を見付けていきたいと思う。

受賞者のひとこと

対象図書名　りぼんちゃん

初めて最終作家審査に、自分の読書作文が選ばれた時は「そうなんだ」というの感情でした。でも塾の先生に「ライバルもいますよ」と言われ、い

「そもそも誰かに勝ちたいという気持ちはあまりないのですが、この時は『受賞したい』という強い感情に変わりました。

今年の表彰式が仙台であるとわかつてからは、増えその思いが強くなりました。毎日ドキドキしながらも受賞した気になつて、仙台旅行や東京で遊ぶこともできるなど、わくわくしながら色々と想像しました。

審査結果の日、学校からの帰宅後小5「最優秀賞」のメールが届いた時は大喜びしました。今回の読書作文を書く事で自分にはたくさんの魔法を身に付ける事が出来るという事を教えてもらい、その魔法を自分の為だけではなく周りの人にも使えるような人になれるようになりたいと思いました。

素敵な本に出会えたことに感謝しています。ありがとうございました。

小学生の部・最優秀賞（小6）

大切な人を守れるように

相田あづき



人は皆、何らかの苦しみを抱えて生きているのかもしれない。その深さはそれぞれ違うだろう。主人公の朱理は、からだが小さく、名前が「あかり」だから「あかちゃん」と呼ばれ、みんなに子供扱いされていた。本人にとつては、それがどんなにイヤ

でたまらなかつたか。でも、見方を変えれば、その程度の悩みしかなかつたとも言える。最初は私も、朱理に対して「幼い」印象を持った。

一方、親友の理緒が抱えている苦しみは、あまりにも深刻で、私たち子供が太刀打ちできる事ではなかつたのだと思う。確かに、他人の家庭の問題など分からぬものだ。たとえ、親友だつたとしても。誰にも触れてほしくないこともあるのかもしれない。果たして、そこに触れない方が、本当の優しさなのだろうか。理緒が自分の家庭のこと、特に父親のことを話したがらない理由を私もずっと気になつていた。それが、まさかの父親の心理的虐待だと知り、とてもショックだつた。「生まれてきただくなかった。」理緒のその言葉に、私まで悲しくなつた。私と同じ六年生なのにこんなに思いつめていたんだ…。子供に一体何が出来るだろう。私の親友がもろい目にあつていたら、絶対、見て見ぬふりなど出来ない。力になりたい。大切な人を守りたいと思う。何が出来るのか、子供の頭で、必死に考えるだろう。でも朱理のように、自分の言葉で一生けん命説明し、大人に助けを求めるという考えは、思いつかないと思う。

以前私は、クラスのボス的存在の女子に悪口を言われている事に気付いた。「あづきって性格悪いよ。」と、皆に言いふらしていた。私には全く思い当たることがなかつた。私は人の悪口は言わないし、誰かの悪口にも加わらない。そんな私がいつの間にか「性格悪い人」にされたいた。そんな悪口を広めておきながら、私の前では笑顔でふるまう彼女に対して私は不信感でいっぱいになつていて。それでも、自分から問い合わせず勇気もなく、気持ちがふさぐばかりだつた。そんな異変に私の親友が気付き、力になると黙つてくれた。まさに、朱理のような存在だつた。親友は、悪口を言つていた女子に対してはつきり言つた。「人の悪口を

言つているあんたの方がよっぽど性格悪いよ！あづきちゃんに謝つたら！」ものすごい迫力だった。それ以来、ボス女子の私へのいやがらせは終わつた。親友は朱理のように強い。悪を正し、私を守つてくれた。

オオカミとは「わざわい」。生きている限り避けることができないのなら、戦う知恵を身につけなければと思う。オオカミと戦わなければならない時が、いつか必ず来ると思うから。私が親友に助けてもらつた分、今度は私も大切な人を守れるようになりたい。

言葉の力で朱理はオオカミと戦い、そして強くなつた。今まで子供扱いされていたが、もう誰も「あかちゃん」なんて呼ばないはず。

対象図書名　りぽんちゃん

受賞者のひとこと

「最優秀賞」という名誉ある賞をいただけたことに、感謝の気持ちでいっぱいです。去年、「優秀賞」をいただいた時も家族で喜び合つていきました。今回はさらに上の賞なので、驚きが加わり、言葉にできないくらい嬉しいです。改めて、セミナーに通つていてよかつたと思います。たくさん読書をし、国語もいろいろな角度から鍛えていたので、少しづつ作文力にもつながってきたように思います。実際、私はセミナーに入つてから作文を書くことが好きになり、このコンクール作文でも、あれこれ考えて作文を仕上げていく過程が楽しいと思うようになりました。入塾したばかりの二年生の頃は、周りの先輩たちの素晴らしい作文力に圧倒されるばかりでしたが、この環境の中で多くのことを学ぶことができて、自分も成長したように思います。

来年私は中学生になります。中学生は原稿枚数も増えるので、今まで以上にじっくり考え、これからも作文を書く時間を楽しんでいきたいと思います。ご指導くださった先生、本当にありがとうございました。

中学生の部・大賞

希望の光



三 上 倖 奈 (中三)

言葉は時に人の心をむしばみ、抵抗できないように支配する。

言葉は時に尊い命をつなぐ、希望の光となる。

どんなに幼く、無力な子供の言葉でも、誰かの支えになることができる。言葉の凶器で傷つけられ、自ら死を選ぼうとする子供たちが世界にどれだけいるだろう。一人でも多くの命を救うためには、子供が安心して話せる環境と、それにもつすぐ向き合う大人の存在が何より大切なのだ。小さく

て、弱虫で、いつも周りにあかちゃん扱いされていた幼い朱理の無力な言葉が、心に傷を負い、生まれてきたくなかったと思うまでに追いつめられてしまった理緒を救う希望の光となつた。自らの境遇をあきらめ、すぐに声を荒げる父に委縮し、心を支配されてしまつた理緒が、唯一信頼できた朱理に、苦しい胸の内をあかした。幼さゆに、誰に助けを求めても、全く相手にされず、受け入れてもらえたなかつた朱理の、あきらめず伝え続けたその行動が、理緒の尊い命をつないだのだ。

――「知識は暗やみを照らす光。」――

“知らない”ことで見えなかつたものを見るようにしてくれる。朱理にとつて、それは言葉だった。理緒が朱理に助けを求めてくれたことで、朱理が理緒のかかえていた痛みを“知る”ことができた。信頼できる友達に出会えたこと、悩みを相談できたことで、閉ざされ

かけた心の扉が、外に向かつて少しずつ開き始めたのだ。悲痛な心の叫びをしっかりと受けとめ、無力ながらあきらめずに声を上げ、行動を起こすことで、希望の光がさしこんだ。動かざるを得なくなつた大人たちが、ようやく真剣に向き合つてくれることになり、具体的な解決策へとつながつた。大人が思うより、ずっとずっと子供はいつも真剣に気持ちを伝えようとしているのかもしれない。どうか、どんなに小さなSOSであつても、見逃さず、耳を傾けてほしい。それぞれの家庭の事情や環境、方針があり、なかなか他人が介入し難いという問題もある。

私は、早産で一三三二八グラムという極低出生体重児で産まれた。肺や呼吸器など、たくさんの機能が未熟で、とても体が弱く、熱ばかりだしていた。知能も運動能力も、一般的な同級生の七・八割できるようになることが目標だつた。少しの風邪でも重症化のリスクがあり、三才頃まで人混みには行けなかつたし、いろいろな感染症を避けるため友達と遊べる機会も限られていた。

三才になり、体を強くするためにスイミングスクールに入会したが、少しの風邪症状でも無理がきかず、重症化するため、休まざるを得なかつた。事情を知らない人には、「少しのことでもよく休む子。」「すぐ休ませる親。」とうつり、心ない言葉も聞こえてきた。

数年たち、選手育成コースへと移つた時も、体調により思うように練習できずに、心身ともに折れてしまいそうになることも多かつた。苦しい言葉も、嬉しい言葉も、信頼できる周りの友達やコーチに自分の気持ちを吐露することで、又頑張ろうと思えた。挫折しかけた時も、コーチや周りの大人、一緒に練習してきた仲間が沢山のメッセージをくれた。その言葉には、時には追いつめられることになつた。同じ言葉でも、自分の精神状態や相手、伝え方、タイミングによって、どちら方も様々

に変わつてることを学んだ。それでもあきらめずに、私を励まし続け、つらく暗やみの中についた私の水泳人生に光をとり戻してくれた。

周りの人たちに、本当に感謝している。

現代社会は“オオカミ”という名の災いであふれている。その“オオカミ”をこの世界から、完全に消し去ることはできない。しかし、信頼できる友達に打ち明け、信頼できる大人がそれを受け止め、まっすぐに向き合い、心の寄り所を作つてあげることで、オオカミに立ち向かう術を手に入れられる。

言葉は時に無力。

それでも、あきらめずに伝え続けることで伝わるものがある。どんなに幼く、無力な子供でも、誰かの心の支えになることができる。幼い子供たちの無力な言葉…その裏に隠された悲痛の心の叫びこそが、希望の光へつながりますように。より多くの人たちがそれぞれの“魔法”に出会い、オオカミとの戦い方を知ることで、世界中の子供たちが、心に傷を負うことなく、健やかに暮らすることを願つている。

対象図書名　りぼんちゃん

大賞へ、審査員のひとこと

本を読んで改めて自分の「言葉論」を展開するのではなく、本を読んだときに発生するこの感情を、ここまで強く作文にできているのはすごいと思います。

どこに生きる希望を見出しができるかというのを考え抜いた完成度の高い、書く人としての志の高い作文になつたと思います。

作品から読み取つたことに加え、自分のこれまで歩んできた道などを文章の中に織り込み、そこでまた改めて「言葉」について考え直して作文として表現するのは中々難しいことだと思いますが、私は言葉というものは、体と心とくつついているものだと思います。

あなたの作文はヒリヒリしながら生きてきた過去や、その時々に置か

れた弱さだつたり、本当に色々なものが表現されています。

言葉はコミュニケーションとして力を發揮するものもありますが、凶器にもなりえるもので単純なものではないと思います。これは読んでいて私たちも改めて突きつけられたような気がしました。

これからもぜひ書いて表現することなど、言葉と体がくつついたところですっと生きてくれたらいいなと思います。

大賞受賞、おめでとうございます。

受賞者のひとこと

このような素敵な賞を頂き、大変嬉しく思います。

「知識は暗闇を照らす光。」朱理にとつてそれは、理緒があげてくれた心の叫びでした。言葉は時に凶器にもなり、心の支えにもなります。

私はこの本に出合つて、言葉の大切さを改めて感じました。

友達の抱える苦しみや痛みを知つたとき、私なら何ができるだろうか。

自分自身も知らず知らずのうちにオオカミにはなつていなかろうか。

可愛らしい表紙とは裏腹に、場面によつては読み進めることがしんどくもあり、深く深く考えさせられる一冊でした。

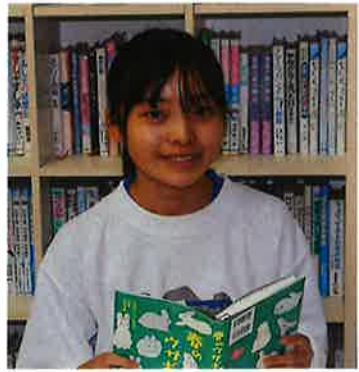
言葉による凶器で傷つけられる人が減り、信頼できる大人たちや友人の魔法の言葉に、希望を見い出せるような、そんな世界であつてほしいと願つています。

みなさんもたくさんの本を読んでください。そこには、心を搖きぶる素晴らしい出会いがきっとあるはずです。

そして、悩みながら、考え、作文にすることで自分自身を見つめ直す大切な時間がもてると思います。

中学生の部・最優秀賞（中一）

味方の存在



高橋杏

「自分のことをわかつてくれる人はいますか？」表紙のこの問い合わせに、私は困つた。こんなこと、今まで考えたこともなかつたからだ。それだけ、自分は恵まれているということだろうか。そうかもしれない。じっくり振り返つてみると、今なら思い当たることがたくさんある。

私は六年生になつたと同時に「反抗期」に入つたと自覚していた。主人公のように、誰も私のことをちゃんと分かつてくれないという気持ちだつた。「中学受験のため」というのが、何よりも優先する毎日だつた。当然、毎日夜おそらくまで勉強。それも難しい内容ばかり。それは覚悟していたけれど、小学校最後の学年なのに、友だちと遊ぶ時間は全くなく、大好きな読書もできない毎日。成績も思うように伸びず、いつもピリピリしていた。ストレスがたまり、ちょっとしたことでもイライラしていた。親の言うことが素直にきけない。すぐに口ごたえする自分。明らかに以前の自分とは違う。反抗的な態度になつてしまふ自分をどうすることもできなかつた。キツくて、つらくて、この世の中に自分の味方は一人もいないような気持ちになつていた。だからといって、もう親に甘えられる年齢でもないので、私はどんどん孤立を深めていったのだった。

そんな中、塾の帰りにある友達が「毎日、電車で通うの、けつこう疲

れるよね」と話しかけてきた。電車で通う？驚いた。耳を疑つた。毎日電車と徒歩で通つていたとは……。誰もが私と同じく親に車で送り迎えをしてもらつているとばかり思つていた。私の場合、家から塾まではそれほど遠くはない。でも、暑い時や雨の日はそれだけで、歩くのがおつかうだし、それだけで疲れる。近い距離でも車での送迎は当たり前になつてた。しかも、夜おそらくまで勉強し、一人で帰るなんて私には考えられなかつた。

あの頃は受験のことで頭がいっぱい、親に感謝する気持ちすら持てなかつたけど、今なら分かる。私の体調管理を気遣つてくれていたからだということ。私の最も良き理解者はやはり親だということ。私がどんなに反抗的な態度をとろうが、いつも私のことを思つて私のそばにいてくれる。いいことがあつた時は一緒に喜んでくれて、悲しい時やつらい時は支えてくれる。私がまちがつた方向に行きそうなときは、全力で悟してくれる。いつも私のことを考えててくれて、たくさんの愛情を注いでくれる。そんな両親がいるからこそ、私は好きなことが出来ている。

友だちにしてもそうだ。親友が六年生の夏、福岡に引越してしまつて、簡単に会うことができない。その時は、あまりにさみしくて、心にぽつかり穴があいてしまつた感じだつた。受験勉強の忙しさと重なり、アミーリアと同じく、「自分は何てかわいそなんだろう」と思つていた。あの時期は何もかもがマイナス志向になつていた。アミーリアの場合、親友と会えなかつたのは春休み期間だけだつたのに、それでもさみしいつて言つていた。私の場合は距離的にあまりに遠くて、このまま会えない可能性が高い。遠くへ行つたら、私のことも忘れてしまうんだろうと勝手に思い込み、私は悲しみのどん底にいたのだった。

でも落ち着いてよく考えてみれば分かる。どんなに距離が離れていて

も、友情の絆はそう簡単には切れたりしない。あれから一年たつた今でも、私達は毎週のようにお互いの学校生活や気持ちを伝え合っている。結局、あの大変な受験期を支えてくれたのは家族だけでなく、親友でもあった。

アミーリアもよく考えれば分かること思う。とれだけの人が彼女を大切に思つていてるかということを。お父さんは愛情表現が下手だけれど、彼女を大切に思つてることは確かだ。不器用なお父さんとアミーリアの心がすれ違つてゐるのを私は少しもどかしく思つた。

人は、自分がつらいと、「かわいそうな自分」にしてしまうのかもしれない。でも、よく考えてみれば分かる。自分の周りには、つらい時に支えてくれる味方が必ずいるということを。両親という絶対的な味方、親友という心の支え。「かわいそうな自分」にしてしまう前に、立ち止まって考える。アミーリアを通して、私はとても大切なことに気づいた。

受賞者のひとこと

作文が得意とはいえない私にとって、これまで「特選」をいただけただけでも嬉しいことでした。今回、「最優秀賞」と聞き、本当に驚いています。私が選んだ本は「春のうさぎ」でした。主人公と自分が重なり、共感できる点が多くだったので、自分の体験を掘り下げる書くことができました。今まで一番、自分の内面を素直に表現できた気もします。

小学三年生で入塾し、毎年このコンクールに参加してきました。学年が上がるごとに作文を書く上で学ぶことも増え、それが自分の成長につながっています。今回、作文を評価していただいたことで、作文を書くコツが少しづかめたように思います。これからもたくさん読書をして、自分の内面をもつとうまく表現できるよう頑張っていこうと思います。

中学生の部・最優秀賞（中二）

幸せのカタチ

中田さや



対象図書名　春のウサギ

手の投稿に対して「いいね」を押したり、コメントし、されたりする」とで、人は幸福感を得られる。家族や友達、地域という現実社会で接する人からだけではなく、インターネット上で出会う人とのつながりは、人の心や生活をそれ以上に豊かしてくれると思っていた。この本に出会うまでは。

この本の主人公、「舞」は、現実社会の満足をしていない生活が嫌いでSNSに投稿している。理想の自分を作り出して、インターネット上で偽り、自分と同じような投稿をしている人とやり取りをする。その人が

自分がよりもつといい、素適な出来事をSNSに投稿していたら、相手のことが羨ましく、妬ましくなり、自分が感じる、相手よりももつといい、現実にはなかつた嘘の出来事を投稿してしまう。「相手よりも怠りたくない」そんな気持ちで、インターネットの中だけの理想の自分に

「いいね」をたくさんもらうことは、どんなに虚しく、自分自身を追い詰めることになるだろうか。投稿するたびに、現実を打ち明けられなくなり、現実を見たくなるだろう。心地のよかつた場所にも違和感を感じるようになり、SNS以外に場所がなくなつて、さらに自分を追い込んでしまう悪循環。インターネットは、他人のキラキラした生活のみSNSを通して目に止まりやすくなり、自分や相手が辛い、嫌だと感じている一面を見ることはできない。読みながら、他者に対する「嫉妬」や「妬み」が、静かに暗い闇が広がるように膨んでいくのが感じられた。

人への「嫉妬」や「妬み」のかけらは、私の中にある。私が入つているテニス部には、部活内で、先輩を含め上位十人だけ出ることが出来る試合がある。私は上位十人に入る出来ず、試合には出られなかつたが、私と同じタイミングでテニスを始めた友達が試合に出ることが出来た。私と同じ実力だと思っていた友達が、私よりはるかにテニスが上手だった。そんな事実に、その友達に対して憧れる気持ち、羨ましい気持ち、妬ましい、薄暗い気持ち。色々な気持ちが私の中で渦巻いた。

自分に近い人や、手の届きそうな人ほど羨ましく感じる。「隣の芝生は青い」の「隣の人」は、すぐ身近にいて、自分とそれほど変わらないのに、自分よりいいものを持っているように感じる人のことだと思う。身近な人が持つその輝いたものへの羨しさが、「嫉妬」「妬み」となり、幸福とは程遠い現状への不満の心理が生まれるのだろう。

人生において人間関係は、切つても切れない関係だと思う。しかし、そもそもそこに幸せについての価値や幸福感を見出すのではなく、自分自身を見つめて、自分基準の幸せのカタチを見つけてみてはどうだろうか。

幸せのカタチは人それぞれ。私は、幸せを真似したり、比べたりせず、心穏やかでいられる自分だけの幸せを見つけていきたい。生きていく上で、人間関係を無くしたり、現実社会でインターネットから離れたたりすることは出来ない。そんなとき「隣の芝生は青い」ことを感じるときがあると思う。そういうときは、自分の見ている芝生は、その人の芝生の「ぐく一部だと考えて、実はその人の苦労が隠れているのではないか」と想像したり、インターネットでの他人のキラキラとした、憧れる生活の表の面だけを羨しがるのではなく、そんな生活を送ることができるようにするために、その人が努力した日々を想像したりしたい。想像を広げて、広い視野で物事を見るようにしていきたい。そして、ただただ羨ましい、妬ましいという気持ちで終わらず、自分自身自らも輝くものの手に入れることができるよう努力し、理想に少しづつでも近づける、前向きな姿勢を持つて行動していこうと思う。

幸せとは、お金や物の数、持つている物など、目に見える物ではない。また、自分と他の人との人間関係から、幸せを見出すのではない。自分自身を見つめて、今、自分がどんな気持ちで、何に喜び、何を感じ、何を大切に思つていて、どうすれば心穏やかでいられるのか。自身の幸せのカタチを考え、自分以外の、他の人の幸せのカタチも尊重していきたい。一人ひとりが違つた人間で、一人ひとり、「幸せのカタチ」が違うのだから。

受賞者のひとこと

初めて読書作文と出会ったとき、あらすじではなく、ただその時感じたことを自分の言葉で書き表すことの難しさを痛感しました。その時、幸運にも最優秀賞を受賞することができ、信じられない気持ちが、嬉しい気持ちを上回っていました。

今回、もう一度この賞を受賞でき、今は自分の気持ちを表現する力が着実に身についていると感じ、嬉しい気持ちしかありません。

今まで本が好きでしたが、読書作文に出会い、インプットだけでなく、アウトプットすることの楽しさを知ったことで、さらに本が大好きになりました。

この度は、素晴らしい賞に選んでいただき、本当にありがとうございました。

中学生の部・最優秀賞（中二）

「仲間」と乗り越えた今

半澤美結

私達中学生には、何も努力しなくとも与えられるものがたくさんある。でも、自分の努力でしか手に入らないものが、いかに多いことか。与えられるものより、自分の手でつかみ取らなければ手に入らないもの



の方が、はるかに多いことに気付く。自分

の望むものを取りに行くのか、諦めるのか。その差はあまりに大きい。人生そのものを大きく左右するほど……。

直大にとって、ギターコード「F」の壁を越えられるか否かが、今後の中学生活の明暗を分ける重要なカギだつたと言える。見るからに高い壁だ。果たして直大は、仲間と出会わなかつたらこの壁を乗り越えることができただろうか。そう考えると、良き仲間との出会いが、いかに大きな力になるか。仲間の存在の大きさを改めて実感する。

私が小学時代から夢中になっていたのは、クイズだ。一つの分野に偏らず、雑学クイズに答えるのが楽しく、もつと知りたいと思ふようになつていつた。毎日やつてある内に物知りになつていくのが嬉しくて、いつかは「クイズ大会」に出たいという夢まで抱くようになつていた。

そんな私が中学生になつて、入りたいと思えるクラブがなかつた。それなら、自分の手で新たに立ち上げようと思い立つた。今思えば、何と怖いもの知らずで無謀な考へだつたことか。意を決して職員室に行くと、「ハイ、無理です。ダメです。」の一言で、先生に追い払われた。前例がないという理由で、一刀両断。断られて「はい、そうですか」とは引き下がれなかつた。やるしかなかつた。でも、その道のりは想像を越える険しいものだつた。

直大が仲間と出会つてどんどん変わつていく姿があの頃の私と重なる。バンドを組む仲間がいたから直大は「F」の壁に挑戦し続けたのだと思う。挫折を味わつても、ひたすら練習し続けたのだと思う。「できるよ、きっと。」仲間のそんな励ましがあつたから。

そう、私にも協力者がいた。私の考へに賛同し、一緒に作ろうと言つてくれた仲間がいた。仲間と一緒に何度も直談判に行つた。「クイズク

「ラブ」は楽しいだけでなく、いかに有意義であるか、プレゼンを展開した。仲間がいると、不足分を誰かが必ず補ってくれる。それはまさに直大のバンドと同じだ。他の楽器や歌がうまくカバーして演奏として成立させるように。

私達も力を合わせて、何度も職員室に通った。あまりのしつこさに先生もさすがに辟易したようで、「じゃあ、シラバスを提出しなさい」と言つた。シラバス? 何それ? 私達の困り顔と対照的に、勝ち誇つた表情を今もはつきり覚えている。そこからが私達の本当の戦いだつた。初めて聞く「シラバス」を調べ、他の学校の活動も徹底的に調べ、かなりの時間を費やして完成させ、先生に提出した。まさか本当に持つてくるとは! と言わんばかりに先生は驚いていた。だが、これで終わりではなかつた。部員数は最低十名集め、顧問の先生は自分達で捜し、依頼せよという二つの条件が追加された。私達は片つ端から勧誘した。「つまらなそう。」「全然興味なし!」そんな冷ややかな反応ばかりだつた。

これほど否定されることは考えてもいなかつた。くじけそうな私を支えてくれたのは言うまでもなく仲間だつた。知恵を出し合い、実力行使に出た。歴史の先生の所に行き、クイズ形式を取り入れた授業を懇願した。その実現は効果絶大だつた。負けず嫌いの生徒達の心に火をつけた。競い合うように皆が参加し、いつもの静まり返つた授業がウソのように、

大盛り上がりだつた。先生も張り切つていて、いつもの先生とは別人のように見えた。この授業がきっかけで、入部者が定員に達し、顧問は歴史の先生が快く引き受けて下さつた。こうして私達は難関を突破したのだつた。やるべきことは全てやつた。許可が下りるまでに、何と一年の月日が流れていった。

では絶対無理だつた。仲間に支えられて強くなつていく直大の婆は私そのものだつた。彼の仲間もそれぞれ個性が違つていたからこそ、補い合えていた。時にはぶつかることもあるが、それを越えていくことで成長できると、はつきり言える。

受験のために友達も作らず、部活にも入らず、勉強ひと筋という人がいる。人間関係が煩わしいからと、人と関わることを拒む人もいる。当たり前のことだが、中学生というこの時は今しかない。この時期に出会う仲間は、かけがえのない宝だと私は思う。

今、わが「クイズ探究クラブ」の部員は十名。負けず嫌いで個性あふれる十名が、きょうも探究心全開で出題を考えている。仲間がいたからこそ、見ることが出来たこの世界だ。大会出場も夢ではない。この仲間どなら。

受賞者のひとこと

対象図書名 Fができない

中三の私にとってコンクール参加が最後となる今回、このような名誉な賞をいただくことができ、驚きと嬉しさで胸がいっぱいです。小学四年生に入塾し、毎年このコンクールに参加してきました。これまで多くの先輩たちが大きな賞を受賞しているので、その分だけたくさんの刺激を受け、自分の学びにつなげてきました。日頃から読書を楽しんでいる私にとって、このコンクールは、一冊の本を深く読み、自分自身に向き合うとてもいい機会でした。じっくり考えながら、全力で作文を仕上げてきました。これまで何度か「優秀賞」をいたたくことができましたが、いつかは表彰式に出席できたら思つていました。今回それが実現できて、達成感でいっぱいです。

いくつもの大きな壁を越えられたのは仲間がいたからだ。私一人の力

情熱溢れる先生のご指導の下、切磋琢磨し合える環境の中での学びは、確実に自分の成長に繋がっていると感じます。正直、今回でコンクール参加が最後かと思うと少し寂しく、残念な気持ちになりますが、この六年間、恵まれた環境の中で培った「考える力」、「書く力」を高校生になつても生かしていきたいと考えています。

これまでコンクールに参加できること、そして、先生にご指導いただきしたこと、本当にありがとうございました。

第32回(令和4年度)全国読書作文コンクール

優秀作品集

令和4年10月 発行

発行 公益社団法人全国学習塾協会

〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-39-2

TEL 03-6915-2293 FAX 03-6915-2294

E-mail info@jja.or.jp

